スキャンロンの価値の反目的論*

高田敦史

概要

Teleology of value is a view of the relationship between values and reasons. According to teleology, the primary bearers of value are states of affairs and all reasons that we have are ones to promote the best state of affairs. Anti-teleologists, on the other hand, hold that some kinds of value are not teleological. Anti-teleologists claim that some kinds of value require respect rather than promotion.

However, the characterization of anti-teleology itself and its main concept, respecting value, have not been sufficiently discussed so far. This paper addresses this issue by examining the arguments of T. M. Scanlon, a leading exponent of anti-teleology.

This paper clarifies the idea of anti-teleology and respecting value by introducing the distinction between forward-looking and backward-looking reasons. Anti-teleology of value is a position that recognizes the constitutive relation between backward-looking reasons and some values, and respecting values are ones with such constitutive relations.

Keywords: 価値の目的論、理由、価値、T. M. スキャンロン

1 序

本稿で扱うのは、価値の目的論と反目的論の対立だ。詳しくは第二節で論じるが、一言で言えば、価値の目的論とは、価値とは何か促進されるべきものであると捉える立場だ。価値の目的論によれば、あらゆる種類の価値は、第一義的には、わたしたちが実現すべき望ましい事態によって例化され、それはどのような種類の価値──道徳的価値、美的価値、認識的価値など──であっても変わらない[*1]。

[*1] ただし、価値の目的論と反目的論の対立で争点になるのは、究極的価値・内在的価値のみであり、道具的価値・外在的価値が問題になることはほとんどない。

* *CAP* Vol. 13 (2022) pp. 174-196. submitted: 2021.09.13 accepted: 2022.01.19 category: 原著論文 published: 2022.02.01.

一方、反目的論は価値の目的論に対抗する立場だ。反目的論は、望ましい事態以外の価値のあり方を認める。反目的論者の多くは──後述するように、その内実が明確に述べられてきたとは言い難いが──、価値の促進とは異なる価値の尊敬というあり方を認める。

以下、この対立に関するイメージをつかんでもらうために、諸分野における先行する議論の状況について、簡単に触れておこう。

なお、価値の目的論と反目的論の対立は、基本的にはあらゆる種類の価値を巡るグローバルな対立──あらゆる価値が目的論的なのか、それとも反目的論的価値も存在するのかという対立──だが、個別の価値、例えば、美的価値が目的論的価値なのか、そうではないのかという問題は個別に論じることが可能な問題だ。このため、倫理学、認識論、美学といった分野では、価値の目的論と反目的論のグローバルな対立だけではなく、個別の価値が目的論的なのか、反目的論的なのかという問題も論じられている。

1.1 倫理学

価値の目的論と反目的論の対立が最初に問題になったのは倫理学だ。価値の目的論は、道徳的正 right・不正 wrong に関する帰結主義の立場を他の価値にまで一般化したものだと考えられる(価値の目的論自体「帰結主義」という名称で呼ばれることもある)。このため倫理学の内部では、道徳的価値に関する目的論・反目的論の対立も論じられてきたし、グローバルな目的論・反目的論についても論じられてきた。本稿で論じる T. M. スキャンロンの議論は、倫理学の内部から生じてきたグローバルな議論の一例だと考えられる。

また道徳に関しては、非常に単純化して言えば、功利主義を代表とする帰結主義の理論は、道徳的価値の目的論であり、一方義務論や徳倫理や契約論は反目的論に位置づけられる[*2]。

1.2 認識論

現在、目的論対反目的論の対立がもっとも盛んに論じられている分野は認識論かもしれない。直接的には Berker(2013)が、倫理学における議論を認識論にも適用し、認識的正当化に関する反目的論を擁護している。またそれに関連して多くの論文が書かれ、このテーマに関する論文集もすでに出版されている(Ahlstrom-Vij & Dunn(2018))。

ただし、認識論における議論は、認識的正当化を目的論的に捉えることに対する批判(あるいはその批判に対する再反論)というかたちでなされることが多く、価値の反目的論の積極的な描像を提示する議論はあまり見られない。

1.3 美学

美学では、直接的に目的論対反目的論の対立が論じられることはほとんどない。ただし、美的価値に

[*2] ただし、細かく言えばこれは正しくない。道徳的価値に関しては、道徳的正・不正と、道徳的良さ moral worth が区別されることが多いからだ。多くの場合、帰結主義者は、帰結主義の適用範囲を道徳的良さではなく、正・不正に限定している。私見では、道徳的良さに関しては、帰結主義者を含めた多くの論者が反目的論を認めているように思われる。

関する古典的立場である美的快楽説は、明確に目的論的な立場の一例になっている。近年では、美的快楽説の批判が盛んに論じられ、反目的論的立場を擁護する論者も多い(Lopes(2018)など)。

1.4 本稿の目的と構成

以上の紹介でもわかるように、目的論と反目的論の対立は、多様な分野にまたがった大きな問題だ。本稿で扱うことができるのは、その中のごく限定された部分にすぎない。わたし自身は──価値に関するグローバルな描像としても、主要な価値の多くに関する描像としても──反目的論が正しい立場だと考えるが、本稿で目的論を決定的に論駁することは難しい。目指されるのは、むしろ、両者の対立点の整理や明確化といった作業だ。

もっと言えば、わたしが関心をもっているのは、反目的論の明確化だ。上で紹介した文献の多くでは、擁護者・批判者ともに、価値の目的論がどのような立場であり、どのような問題を抱えているのかについては詳細に論じられている。だが、一方、価値の反目的論についてはほとんど議論がない。多くの場合、目的論を否定する立場という消極的な規定に留まり、反目的論者が掲げる描像の積極的な規定はほとんどなされてこなかった。その主要なアイデアである、促進からは区別される尊敬が、何を意味するのかも明確ではない。

本稿では、この問題にアプローチするため、価値の反目的論を体系的に擁護した古典的なテキストである T. M. Scanlon の *What We Owe to Each Other* 第 2 章の検討を行なう(Scanlon(1998))[*3]。これは言うまでもなく、価値論・理由論の古典的なテキストであり、その中でスキャンロンは価値の目的論を批判するとともに、価値のバックパッシング説を提示している。

ただし、本稿の関心は、解釈よりもむしろその応用にある。本稿の関心はあくまでも、美的価値や認識的価値といった個別の価値について論じる上で有益な方針をスキャンロンの議論から引き出す点にある。後半 3.5 節などでも論じるように、本稿が引き出す方針は、道徳的価値、認識的価値、美的価値を考える上でも、一定の示唆を与えうるものだ。

以下の構成。第 2 節では、スキャンロンによる価値の目的論批判の論証を導入する。また、反目的論の言う価値の尊敬が何を意味するのか明確ではないという問題が指摘される。第 3 節では、後方指向の理由と前方指向の理由という区別を使って、反目的論の主張、特に価値の尊敬とは何であるかを明確化する。さらに、この解釈による解釈上の利点と理論的な利点のそれぞれを説明する。

2 スキャンロンの目的論批判

本節では、*What We Owe to Each Other* 第 2 章“Values”における価値の目的論批判を紹介する。

[*3] スキャンロンの反目的論とバックパッシング説の全般的紹介としては、岡本(2018)を参照。安倍(2019)は双条件的バックパッシング説の擁護を行なっている。またスキャンロンの道徳に関する立場も反目的論的なものだと考えられるが、これについては吉村(2021)などを参照。

2.1 価値の目的論

まず価値の目的論に関するスキャンロン自身の記述を確認しよう。

> 「良い」ものあるいは「価値がある」ものに関する見解のうち、よく知られていて重要なものは、「目的論的」見解と呼ぶのがふさわしいものだ。その立場によれば、価値の第一義な担い手は、事態や、時間を通じて世界がそう進むかもしれないあり方である。また、これらのものは、内在的価値──つまり、他の価値あるものに貢献したり、それを可能にしたりする傾向というのではない価値──をもちうる、と。Scanlon(1998), p. 79

この特徴づけによれば、目的論とは、価値の第一義的な担い手が事態であるとする立場だ。だが、この特徴づけだけでは、目的論という立場のポイントは見えにくい。論争の焦点となるのは、価値の担い手が何であるかという形而上学的問題ではなく、むしろ、価値についてのこの捉え方が、行為や態度の選択に与える規範的帰結の方だからだ。実際、上の引用箇所のすぐ後でスキャンロンは次のように述べている。

> 行為者として、わたしたちが事態に対してもつ関係は、事態を実現したり、事態の生起を妨げたり、あるいはそれらの生起の見込みを高くしたり低くしたりすることに存している。この立場によれば、（少なくとも価値の問題に関するかぎり）わたしたちがすべきことは、最善の事態、すなわち最大の価値を持つ事態を実現するように行為することである。Scanlon(1998), pp.79-80

つまり、価値の目的論によれば、わたしたちはより良い事態を実現し、より悪い(あるいはより多くの負の価値をもつ)事態を阻害するようにふるまう理由をもつ。

以上をまとめれば、価値の目的論の核となる主張は次のふたつになる。

- **価値の担い手に関する主張**: 価値の第一義な担い手は事態である。つまり、あらゆる種類の価値は、第一義的には、望ましい事態のもつ〈望ましさ〉である。
- **価値と理由の関係に関する主張**: わたしたちは正の価値をもつ事態を実現・促進する理由をもち、負の価値をもつ事態を実現・促進させない理由をもつ。また、価値に関わる理由は、このかたち以外にはない。

もちろん、この両者の主張は密接に関わっている。つまり、価値の担い手が事態だからこそ、価値に対する反応は、その実現・促進になるわけだし、反対に、価値に対してもつべき反応が実現や促進だからこ

そ、価値の担い手を事態と捉えることが自然になる。

2.2 スキャンロンの前提: 価値と価値づけ

スキャンロンの価値の目的論に反対する論証は、具体的には反例の提示だ。ただし、スキャンロンの反例では、価値に関する話題と価値づけに関する話題がどちらも登場し、両者の間を行き来する。これはスキャンロンが価値と価値づけに関する一定の対応関係を前提しているためなのだが、混乱を招かないように、反例の紹介に移る前に、スキャンロンの前提や用語法に説明を与えておこう。

第一に、価値について。スキャンロンの用語法では、修飾語なしに「価値がある valuable」という語を使う場合には、あらゆる者にとって価値をもつことを指す。一方、特定の行為者にとっての価値は、行為者相対的価値と呼ばれている。

第二に、価値づけについて。価値づけは、「何かに対して特定の肯定的な態度を取る理由を認め、そしてそれに関して特定の仕方で行為する理由を認めることだ」とされる(Scanlon(1998), p.95)。だが、誰かが何かを価値づけているからと言って、必ずしもその対象が価値(あらゆる者にとっての価値)をもつことを認めているとはかぎらない。例えば、自分の子どもを価値づける人は多いだろうが、これは、自分の子どもに万人にとっての価値を認めているからではないだろう。

最後に、両者の関係について。あらゆる価値づけが価値があることに対応するわけではないが、特定の個人だけではなく、あらゆる者にとって、価値づけることが適切であるようなものがあれば、それは価値があるものと見なすことができるだろう。「何かに価値がある valuable(あるいは「価値をもつ of value」)と主張することは、他人にも、自分と同じように、それを価値づける理由があると主張することだ」(Scanlon(1998), p.95)。

この前提は以下のような双条件文のかたちでまとめられる[*4]。

価値・価値づけリンク

x には価値がある iff あらゆる者に x を価値づける理由がある[*5]

一言で言えばこれは、普遍妥当的な価値づけと価値があることを結びつけたものだ。一見するとこの前

[*4] 細かい用語法について。スキャンロンの定義の不備について、Stratton-Lake & Hooker(2006)が指摘している。スキャンロンの価値づけの定義には「理由を認める」という文言が含まれており、価値があることの定義には「価値づける理由がある」という文言が含まれている。両者を機械的に合わせると、価値があることの定義は「理由を認める理由がある」という奇妙なものになってしまう。しかしこれはおそらく意図通りではないだろう。おそらく好意的に読めば、価値づけとは、肯定的態度・行為の理由を、**自分に対して**認めることであり、価値があると判断することは、肯定的態度・行為をとる理由を**万人に対して**認めることだという風に定義していると考えられる。

[*5] ここで、あらゆる者が価値づける理由をもつものなど本当にあるのだろうかという疑問が生じるかもしれない。しかし、少なくとも、万人にとって価値があると**主張されて**いるものが数多くあることは事実だろう。例えば、カントによれば、わたしたちは何が美しいものかについてほとんど合意に達することはないが、にもかかわらず、何かが美しいと述べる際には、万人に同意を要求している。本稿の関心は、万人が同意するような価値の担い手が本当にあるかという点ではなく、何かが価値をもつと主張され、万人への同意が要求されている際に、どのような事柄が意味されているかという点だ。

提は当たり前に見えるかもしれない。実際、この前提は、当然ながら目的論・反目的論の対立に関しては中立であり、目的論者の側にこれを拒否する理由はない。

だが、これは論証上は重要なステップになっている。目的論と反目的論では、そもそも価値の捉え方が大きく異なるため、何を価値の事例とするかが食いちがう。そのため、目的論者も認めるような反例をあげるためには、両者ともに認められるような共通の前提に基づいて、価値の事例をさだめる必要がある。価値・価値づけリンクは、以上のような価値の事例をさだめる基準として使用できる。

実際、この後に見るように、スキャンロンの戦略は、価値づけの多様性をもとに、価値の多様性を擁護するというものになっている[*6]。

2.3 スキャンロンの反例: 友情の例

スキャンロンが価値の目的論の主な反例としてあげるのは友情の価値の事例だ。もちろん、友情が価値・価値づけリンクの右辺の条件を満たすかどうか——つまり万人が価値づける理由をもつものかどうか——という点には議論の余地があるだろう。しかし、スキャンロンはこれを前提しているため、ここでこの前提を疑問に付すことはしない。少なくとも、友情の価値がある程度幅広く認められていることは前提としてもいいだろう[*7][*8]。

ところが、スキャンロンによれば、目的論では友情の価値をうまく説明することができない。スキャンロンは、友情の価値づけに含まれる理由を、ふたつのカテゴリーに区別している[*9]。

1. **尊敬的価値づけ**: 以下のような事柄に理由を認めること——友人に対して忠実であること、友人の利益に配慮すること、友人と連絡をたやさないこと、友人と一緒に時間をすごすこと。
2. **促進的価値づけ**: 以下のような事柄に理由を認めること——新しい友人を増やすこと、友人を維持すること、他人が友人をもつようにすること。

尊敬的価値づけのカテゴリーには、良き友人であるために実行するであろう事柄が含まれる。例えば、

[*6] スキャンロンは、この前提を、主に、価値づけの多様性をもとに価値の多様性を擁護するというかたちで使用している。この方向で議論を進める際、重要なのは、双条件のうち、「価値づけ→価値」という方向の条件文——つまり、普遍妥当的な価値づけが認められるような対象であれば、価値をもつという条件文——であると考えられる。このため、こちらの方向の条件の方が重要かもしれないが、双条件の両方を認めていることは明らかなので本文では双条件の両方を明記している。

[*7] スキャンロンが友情の価値を例にあげた理由のひとつとしては、価値の目的論の代表的論者としてあげられているムーアが友情に内在的価値を認めていることが考えられる(Moore (1903))。また、スキャンロンの友情の価値についての説明は、基本的にストッカーの説明にしたがっている(Stocker(1981))。このため、ストッカーの説明を使うために友情の事例を選んだのではないかとも考えられる。

[*8] 正確に言えば、友情の価値に関しては、二種類のものが考えられるだろう。「友情というものは良いものだ」と言う場合に見られるような、友情一般の価値と、「このふたりの友情は立派だ」と言う場合に見られるような、個別の友人関係の価値だ。スキャンロンは主に前者を考えているように思われる。

[*9] 「尊敬的価値づけ」「促進的価値づけ」というラベルは引用者による。

一般に、友人を裏切ることに反対する理由を何ら見出さない人は、友情を価値づけているとは言えないだろう。

促進的価値づけには、世界の中に良き友人関係の事例を増やすことに相当する事柄が含まれる。おそらく、友情を価値づけている人であれば、人々が互いに友人になる機会を増やすことを望ましいと考え、交流パーティなどを開催するかもしれない。

価値の目的論の問題点は、促進的価値づけを説明できるが、尊敬的価値づけを自然な仕方で説明できないという点にあるとされる。

この指摘が正しいとすれば、目的論が友情の価値をほとんど説明できないというのは確かだろう。というのは、友情の価値にとって中心的なのは、明らかに尊敬的価値づけの方だからだ。例えば、世界の中に友人関係の数を増やすことを望んで交流パーティなどを開催しているが、平気で自分の友人を裏切る人は、ほとんどまったく友情を価値づけていないように思われる。

一方、目的論によって尊敬的価値づけを説明できないことを見るには、以下のような例を考えてみればよいだろう。

お見舞い

メロスは友人のセリヌンティウスが病気で入院していると聞いて、セリヌンティウスのお見舞いに行こうと決めた。

メロスは、友人が病気で入院していることを、お見舞いに行くための十分な理由と見なしている友だち甲斐のある人物だ。スキャンロン型の説明によれば、まさにこの〈友人が入院していることをお見舞いに行くための十分な理由と見なす〉ということそれ自体が、メロスが友情を価値づけていることのひとつの現われに他ならない。

ところが、目的論者には、このような説明の仕方は許されていない。というのは、目的論の説明によれば、価値をもつのは第一義的には望ましい事態だけであり、価値に関わる理由は、すべて何らかの望ましい事態を促進することに関わるからだ。したがって、メロスの決定が、友情の価値づけに関わるものであれば、メロスは、友情の成立を望ましい事態と捉え、それを促進しようとしているのでなければならない。この説明を強引にお見舞いの事例に適用するなら、メロスは、セリヌンティウスとの良き友人関係を維持するために、お見舞いに行くことになるだろう[*10]。

[*10] ただし、実際にはこの際、友情の価値が、どのような種類の事態によって例化される価値なのかという点が問題になる。友情の価値の目的論的解釈として、おそらく最もストレートな捉え方は、友情の価値は、友人関係の成立や維持――少なくとも「良き友人関係」と呼ばれるような友人関係の成立・維持――という種類の事態によって例化されるという立場だろう。スキャンロンもそのように捉えていると思われるため、本文ではその立場を前提している。ただし、この点には、疑問の余地がないわけではない。

仮に、友情の価値を、もっと別種の事態によって例化される価値だと捉えるのであれば、友情の価値は〈メロスがセリヌンティウスのお見舞いに行く〉という事態にも例化されると考える余地はあるかもしれない。実際、Hurka (2006)はそのような解釈のひとつと思われるものを提示し、スキャンロンに反論している。ただし、Hurka (2006)の解釈も含め、そのような解釈の多くは、友情の価値について、いくらか人工的な解釈に依拠せざるをえなくなるという問題を指摘でき

だが、これはメロスの行為の解釈としてはきわめて不自然だろう。病気の友人のお見舞いに行く理由が、友人関係を維持するためだけであれば、むしろ友情を価値づけていない「友だち甲斐のない」人物と解されるのではないだろうか。

もちろん、奇妙であるというだけなら、世の中にそのような変わった人がいる可能性は否定できないが、目的論者が述べているのはそれ以上のことだ。目的論者は、友情を価値づけるあらゆる者が、まさにそのような理由づけを行なうし、行なうべきなのだと述べている。また、仮にそのような理由づけを行わない人がいた場合、その人は友情を価値づけていないと述べなければならない。

例えば、仮にこの事例でメロスがそのような理由を採用していないとしよう。メロスは、単に友人が病気だという理由だけでお見舞いに行くのだと本心から述べ、実際にその理由で行為するとしよう。この場合、目的論者は、メロスは友情を価値づけていないと述べなければならないが、これはおかしな説明だろう。

もちろん、目的論者は、こうした反例を前にして、他の種類の解釈を考え出すことができるかもしれない。だが、ひとつ注意しておかなければならないのは、反目的論者は、この種の反例をバリエーションに富んだかたちで、無数に作り出すことができるという点だ。例えば、スキャンロンは友情の価値以外に、科学の価値に関する反例をあげている。本稿の後半では、友情の価値にかぎらず、スキャンロン型反例の作り方を一般的に定式化する。こうした無数の事例があるかぎり、友情の事例について、目的論に合うような解釈を提出したとしても、その効果は限定されている。

2.4 問題点: 説明の要求

以上では、スキャンロンによる、価値の目的論の批判を紹介した。本稿で取り組みたいのは、この議論の背景にある対立点をより明確化することだ。

これが重要な課題であることを見るために、価値の反目的論に対するひとつの批判を紹介しよう。

わたしの知るかぎり、反目的論への正面からの批判はこれまであまり論じられたことはない。だが、フィリップ・ペティットによる批判は、そのうちの代表的なものだろう(Pettit(1991))。なお、ペティット自身は「目的論」ではなく、「帰結主義」と呼んでいるが、ここで言う帰結主義は、通常の意味での道徳的帰結主義――つまり道徳的正 right に関する立場――ではなく、本稿で言う価値の目的論にあたる。

ペティットによれば、目的論(帰結主義)は、反目的論よりも単純だ。

> 第一に、帰結主義は、価値に対するひとつの反応しか認めていないのに対し、非帰結主義はふたつを認める。非帰結主義者はすべて、一部の価値――例えば、忠実さや尊敬に関連する種類の価値――は、促進されるべきものではなく尊重される honoured べきものであるという立場を引き受けている。しかし、道徳理論における役割にかかわらず、非帰結主義者はみな、他の一部の価値――経済的繁栄、個人の衛

る。また本節の最後の段落でも述べるように、この種の別解釈は友情の事例にしか適用できない種類のものだ。いずれにしても、本節の趣旨はあくまでスキャンロンの議論の紹介にあるため、これ以上友情の例の詳細を検討することはしないつもりだ。

> 生、核施設の安全など──が促進されるべきものであることに同意する。このため、価値が選択を正当化する方法について、帰結主義者がひとつの公理を導入するのに対し、非帰結主義者はふたつの公理を導入しなければならない。Pettit(1991), p. 238

要約すれば、ペティットの批判は、反目的論者は、結局のところ、促進を求めるような価値も認めているのだから、促進型と尊敬型という二種類の価値を認めることになり、より複雑な立場になるというものだ。

もちろん、こうした批判は、反目的論にとって、それほど強力な批判ではないかもしれない。単純さがどの程度理論を正当化するのかも明確ではないし、そもそも別の観点からすれば、反目的論の方が単純であるといった反論もできるからだ[*11]。

だが、少なくとも、目的論を採用する動機が、多くの場合そのわかりやすさにあるというのはありそうなことだ。価値は、わたしたちに対して、それを促進すること・実現することを要求するという説は少なくとも非常に理解しやすい。促進が何を意味しているのかも明確だ。

他方、反目的論が言う尊重がどのようなことを意味しているのかは明確ではない。結局のところ、スキャンロン自身も価値の尊敬に関してごくわずかなことしか述べていない。スキャンロンが述べているのは、第一に、何かを価値づけることは、その対象に関するさまざまな理由を認めることを含んでいること、第二に、そこには「共通の核として、その事物を敬う admiring 理由と、それを尊敬する respecting 理由が含まれる。ただし「尊敬」は、さまざまな事例で、実に異なった事柄を含む」(p.95)というだけだ。

ここで大きな問題となるのは、スキャンロンが「尊敬する理由」がどのような種類の理由なのかをほとんど明確にしていないことだ。というのは、例えば、目的を達成するにあたって、有効な手段を選ぶ理由があるといった種類の理由であれば、当然ながら目的論者も認めるだろうが、スキャンロンが述べているのは、明らかにこれとは異なる種類の理由であるからだ。だが、それがいかなる種類の理由なのかについては、ほとんど説明されていない。

こうした観点からすれば、尊敬する理由について、さらなる説明がなされないかぎり、反目的論が導入する尊敬を求めるタイプの価値は、何かミステリアスなものに見えてしまうだろう。

したがって、わたしはこうした批判は、少なくとも説明の要求としては真剣に受け止めるべきものを含んでいると考える。このため、次節以降では、反目的論者の言う尊敬型の価値がいったいいかなるものなのかを明らかにする。

3 反目的論における価値と理由

本節では、前方指向の理由と後方指向の理由という二種類の理由の区別を使って、価値の反目的論者の言う尊敬型の価値および尊敬する理由とは何かを明確化する。

[*11] 例えば、促進は、尊重の一形態であると考えるだけでも、反目的論がふたつのものを導入しているという前提は崩れてしまう。

3.1 方針の提示

わたしの考えでは、尊敬型の価値について理解するためには、まず二種類の理由の区別を行なう必要がある。本稿では Müller(2011)にならって、この二種類の理由を、それぞれ「前方指向の理由」「後方指向の理由」と呼ぶことにする。詳細な特徴づけは次節で導入するが、簡単に言えば、前方指向の理由とは、将来の目的によって導出される理由であり、後方指向の理由とは、現在・過去の状況から導出される理由だ[*12]。この区別を使えば、価値の目的論と反目的論の対立を次のように整理できる——価値の目的論者は、価値を前方指向の理由だけに関連させるが、一方、反目的論者は後方指向の理由が価値と構成的に関連することを認める。また反目的論者の言う尊敬する価値は、後方指向の理由と構成的に関連する価値であると理解することができる。

なお、スキャンロン自身は、後方指向の理由について明示的には述べていないが、扱っている問題が同じであることは指摘できる。スキャンロンの友情の価値に関する議論は、本人も参照している通り、マイケル・ストッカーから取られているが、ストッカーがその論文でやっているのはまさに本稿でいう後方指向の理由を使って友情の価値の事例を説明することだからだ (Stocker(1981))。

ただし、前方指向の理由／後方指向の理由の区別に関しては、さまざまな論者がさまざまな名前で呼んでおり、またその特徴づけも少しずつ異なっている。例えば、Muñoz(2018), Muñoz(2020)は両者を目的的理由、反応的理由と呼んでおり、Stocker(1981)は「…のため in order to/for the sake of」と「…から out of」、あるいは「テロス telos」と「アルケーarche」と呼んでいる[*13]。これらの区別を完全に同一視はできないかもしれない。

このため本稿では、この区別の特徴づけに関して、なるべく中立的に議論を進めたいと考えている。というのは、二種類の理由の区別が正確にはいったいいかなるかたちでなされるべきかという問題は、本稿では完全には扱いきれない問題だからだ。確かに、反目的論の主張の明確化という観点からすれば、この二種類の理由の区別についても——特に後方指向の理由について——明確化できる方が望ましいが、本稿で扱える範囲はかぎられている。むしろ、本稿の主たる貢献は、これまであまりつながりがあるとは思われていなかったふたつの論点——価値の反目的論と、後方指向の理由——の間の接続を明らかにするという点にある。

[*12] ミューラーはこの用語をアンスコムから取っており、「前方指向」「後方指向」という名前は、時間的な将来(前方)と、過去・現在(後方)に対応している。また、ここで言う「将来」「現在」「過去」は、おそらく、行為意図の形成時点を基準とした区分だろう。行為者が行為の意図を形成する際に実践的推論を行なうような事例を念頭に置いた上で、その時点より未来を「前方」、それに対する現在・過去を「後方」と呼んでいると思われる。ただし、前方指向の理由が関わる目的が必ず未来に属するものでなければならないかという点については疑問の余地があり、ミューラーも自らその点を指摘している(Müller(2011), p.245)。

[*13] 他の例をあげれば、Raz(2009)は「実践的理由」と「適合的理由」と呼んでいる。なお、Muñoz(2018), Muñoz(2020)は、Raz(2009), Müller(2011)を直接に参照した上で、両者の区別に対応するものとして目的的理由／反応的理由の区別を導入しているため、これらの区別を同一視することはある程度普及した見方だと言えるだろう。

また、パーフィットの「対象が与える理由」と「状態が与える理由」の区別もまた本稿の区別に多少類似している(Parfit(2011), pp.420-432)。ただし、パーフィットは状態が与える理由の具体例として、欲求の理由／信念の理由しか扱っていないため、両者が完全に対応するかどうかははっきりしない。

本稿ではまず Müller(2011)に即して両者を区別した上で、ミューラーの主張のうち、論争的と思われる部分については保留するというかたちで説明を進めたい[*14]。

ただし、前方指向の理由／後方指向の理由の説明に入る前に、ひとつ説明しておかなければならないことがある。ミューラーは、前方指向の理由／後方指向の理由を、前方指向の推論／後方指向の推論という二種類の実践的推論に対応させている[*15]。このため、実践的推論と理由の関係について、最小限の説明を与えておこう。実践的推論の具体例としては、以下のようなものが考えられる。

実践的推論の例

1. 目的: 快をえる
2. マッサージに行けば、快をえられる
3. よって、マッサージに行く

こうした推論は、現実の行為者の心理的過程としても生じうるが、同時に、行為や態度に対する正当化関係を示すものと捉えることができる。1 の目的をもち、2 の信念をもつ人が 3 のような選択をすることは妥当だろう。よって、実践的推論は、行為や態度の理由について、その**理由の内容**を示すために使用することができる。例えば上の例で言えば、1 や 2 が、マッサージに行くという行為の理由の内容に対応する。

実際には、実践的推論の目的が適切なものではなかったり、前提となる命題が偽であるような事例を考えればもう少し複雑になるが、本稿では、そのような複雑な事例は考えない。以下では、目的が適切と見なされ、前提がすべて真であるような推論の例だけを考えよう。そうした理想的な事例に限定すれば、実践的推論の前提は、結論部分に来る行為や態度の規範理由——正当化を与える理由——と一致する[*16]。

3.2 前方指向の理由と後方指向の理由

先ほどあげた実践的推論の例は、前方指向の推論の例にもなっている。

前方指向の実践的推論の例

1. 目的: 快をえる
2. マッサージに行けば、快をえられる
3. よって、マッサージに行く

[*14] ここで特に Müller(2011)を選んだ理由としては、第一に、ミューラーがこの区別について特に詳細に論じている点と、第二に、ミューラーのように実践的推論との関連で見た方が目的論との関連が見えやすくなるためだ。

[*15] さらに元をたどれば、ミューラーの区別はアンスコムの区別を元にしている(Anscombe(1957))。もともとアンスコムが区別したのは、前方指向の動機、後方指向の動機、動機一般という三種類の動機の区別だ。一方、ミューラーは、アンスコムの動機の区別のうち、後方指向の動機と動機一般の区別を疑問視しており、おそらく後方指向の動機と動機一般の両方に対応する理由を後方指向の理由に含めている。

[*16] また、ミューラーの言う「前方指向の理由」「後方指向の理由」は元来は規範理由ではなく、動機理由に関する区別だと考えられるが、本稿のように理想的状況のみを考えるのであれば、規範理由／動機理由の区別が問題になることはない。

この実践的推論においては、まず快をえることが**目的**として設定され、マッサージはこの目的を実現する**手段**として正当化される[*17]。こうした実践的推論は、いわば、目的から手段へと正当化を伝搬させるものと捉えることができるだろう。ここでは、前方指向の実践的推論の前提である 1 と 2 が、前方指向の理由にあたる。

先ほどの実践的推論と同様のかたちで、前方指向の推論の骨組みだけを一般的に書けば以下のようになる[*18]。これを前方指向の推論の一般的形式と捉えることができるだろう。先ほどの例と同じく、ここでも前提である 1 と 2 が前方指向の理由に相当する。

前方指向の推論

1. 目的: 事態 S を実現する
2. A を遂行すれば、S を実現できる
3. よって、A を遂行する

一方、行為・態度の理由は、こうしたものだけに限定されるわけではない。ミューラーはこの種の理由の豊富な例をあげているが、一部をあげると

- 約束: 今日公園に集まる約束をしたので、公園に行く。
- 復讐: あいつが父を殺したので、わたしはあいつを殺すのだ。
- 服従: 上司が言ったので、そうした。
- 感謝: あの人が助けてくれたので、わたしも助けたのだ。
- 誠実性: わたしはそうは信じていないので、その宣誓書にサインしなかった。
- 正義: この自転車はわたしのものではないので、返したのだ。

こうした事例においては「ので」の前半部分が、後半部分の理由になっている。もちろんこれらの事例の一部が妥当な理由かどうかについては異論の余地があるかもしれないが、少なくともわたしたちがこのような規範的理由の**一部**を認めていることは端的な事実だろう。また、こうした事例では、行為・態度は、前方指向の推論のように、手段として正当化されているわけではない。むしろ、前半部分で述べられた状況に対し、後半部分の行為・態度が適合しているがゆえに正当化されると考えられる。

さらに、この種の理由づけは、一定の前提のもとで、特定の行為や態度の正当化を導き出すという意味で、実践的推論の一種と見なすことができる。本稿で後方指向の実践的推論と呼ばれるのはこの種の推

[*17] 正確に言えば、遂行される行為は、目的を実現させるための因果的手段である場合もあれば、目的自体を構成する構成要素である場合もある。例えば、横臥することによってヨガをする場合、横臥はヨガをするための因果的手段というより構成要素だが、ここではそのような構成要素も含め、広い意味で「手段」と呼んでいる。

[*18] ミューラーが提示している前方指向の推論の一般的パターンはもう少し複雑だが、ここでは多少単純化するとともに、本稿の論述に合うように改変している。

論だ。前方指向の理由が前方指向の実践的推論の前提に対応するのと同じように、後方指向の理由は後方指向の実践的推論の前提に対応する。

また、行為の理由にかぎって言えば、前方指向の理由の方がなじみのあるものかもしれないが、信念の理由や感情の理由といった態度の理由については、むしろ後方指向の理由の方が一般的だと考えられる(e.g.「証言があったのでそれを信じている」「侮辱されたので怒ったのだ」)。実際 Raz(2009)は、信念の理由および感情の理由はすべてこの種の理由であると捉えている。

ミューラー自身の特徴づけによれば、後方指向の推論の一般的パターンは以下のようなものになる(Müller(2011), p.257)[*19]。

後方指向の推論(1)

1. 妥当な推論パターン P: S タイプの状況においては R タイプの反応が求められる
2. 現在の状況は S タイプの状況だ
3. A を遂行することは R タイプの反応だ
4. よって、A を遂行する

以上の特徴づけに際して、ミューラーはおそらく後方指向の理由を、何らかの一般的な規範的推論のパターンを個別状況に当てはめるというかたちで理解していると考えられる。

だが、本稿ではこの特徴づけを受け入れるつもりはない。この特徴づけを受け入れない理由は、こうした推論が存在しないからではない。単に、後方指向の推論一般が、例外なくこのかたちを取らなければならないという主張には、それほど強い根拠がないと思われるからだ。

例えば、ミューラーのような一般的パターンの適用ではなく、以下のような推論によって、A を遂行する規範的理由が認められることはありえるかもしれない[*20]。おそらく理由に関する個別主義者——一般原則のかたちを取らないような理由づけのあり方を認める論者——は、そのような理由を認めるだろうし、少なくともそれをあらかじめ排除するべきではない。

後方指向の推論(2)

1. 現在の状況は F だ
2. よって A を遂行する

そこで本稿では、ミューラーの特徴づけを修正し、後方指向の推論／後方指向の理由に関しては、も

[*19] 以下の記述は、本稿の論述に合うようにミューラーのものとは多少改変している。

[*20] 個別主義的理由をこのような形式で書き表わすことが適切かどうかは疑わしいかもしれない。だが、個別主義的な理由については、定義上一般的な形式で書き表わすことができるものではないため、あえて書くとすれば、このようなかたちでしか表現できないように思われる。

っとオープンな特徴づけを採用したい。本稿の特徴づけによれば、後方指向の理由に含まれるのは、(1)前方指向の理由ではなく——すなわち、目的手段関係によって導出されるタイプの理由ではなく、かつ、(2)状況に適合する行為・態度を正当化するタイプの理由である[*21]。もちろんこの特徴づけは素描的なものにすぎず、特に、状況への適合という概念については一定の曖昧さが残されている。しかし、すでに述べたように、本稿の主たる目的は、この区別を洗練させることにあるわけではない[*22]。

3.3 区別に基づいて説明する

つづけて、上記の区別を、価値の目的論と反目的論の対立に関連づけよう。注意しておかなければならないが、上記のような二種類の理由が区別できることそれ自体は、価値の目的論・反目的論の対立からは独立だ[*23]。二種類の理由の区別は、目的論者でも反目的論者でも認めることができる。両者の対立点は、むしろ、それらの推論と、価値の関係にある。

本稿でここまで論じてきた価値の目的論によれば、価値は、前方指向の推論の究極的目的の位置に来る。前方指向の推論の骨組みを再掲すれば、

前方指向の推論

1. 目的: 事態 S を実現する
2. A を遂行すれば、S を実現できる
3. よって、A を遂行する

価値の目的論によれば、価値の第一義的な担い手は、この推論パターンのうちの事態 S であり、価値によって理由が与えられるのは、この推論パターンのうちの A に限定される[*24]。価値の目的論は、あくまで価値の抽象的な構造を巡る立場であるため、いかなる事態 S が望ましいのか、いかなる手段によって S が実現されるのかという点についてはオープンだ。だが、道徳的価値であれ、認識的価値であれ、美的

[*21] (1)を満たすが(2)を満たさない理由——つまり前方指向でも後方指向でもない理由——が存在するのかどうかはわからない。あるかもしれないし、ないかもしれない。本稿では、あらゆる理由が前方指向／後方指向の理由のいずれかに分類されるといった主張をするつもりはない。

一方、(2)を満たすが、(1)を満たさない理由——つまり、目的手段関係によって導出されるような後方指向の理由——が存在しうるかどうかは、状況への適合という関係をどのように明確化するかによって変わりうるだろう。わたしはこの点について、今のところまだ明確な意見をもっていない。こうした側面でも、本稿の特徴づけはまだ素描的なものにすぎない。

[*22] 本文では省略したが、もうひとつ前方指向の理由と後方指向の理由の違いで重要な論点がある。それは後方指向の理由に関しては、行為者の動機がより重要なものとなり、「正しい種類の理由」と「間違った種類の理由」と呼ばれる区別が生じることだ。私見では、間違った種類の理由は、特定の後方指向の理由に従うべき場面でそれ以外の理由——前方指向の理由や、別種の後方指向の理由——に従うことによって生じる(Raz(2009)が同様の説明を与えている)。

[*23] 実際、ラズはおそらく価値の目的論の立場に立っているが、後方指向の理由に対応するもの(適合的理由)を認めている。一方、それらの理由は、価値とは無関係な理由であると捉えている(Raz(2009))。

[*24] 事態 S の位置に来うることは、価値の第一義的な担い手であるための必要条件ではあるが、十分条件ではない。というのは、目的の位置に来るものは、究極的目的ではなく、中間的な目的であってもかまわないからだ。

価値であれ、いかなる価値であっても、これと同種の推論が適用される。例えば、道徳的価値(認識価値、美的価値など)をもつ事態は、その事態を実現する手段に、それを正当化する道徳的理由(認識的理由、美的理由など)を与える。他方で、目的論者は、価値と理由の関係がこれ以外のかたちをとることを認めない。具体的には、後方指向の推論が価値と関わることを認めない。

2 節で説明したように、スキャンロンは価値の目的論を、主として、事態のみを価値の担い手とする立場として特徴づけている。以上で提示した目的論の特徴づけは、スキャンロンの特徴づけと大きく異なるわけではないが、それを部分的に改良したものと見なすことができる。本稿のように、目的論者の立場を、前方指向の実践的推論と結びつけて理解する利点として、第一に、「促進」という前理論的な用語に訴える必要がないこと、第二に、目的論的価値と関わる理由の種類を前方指向の理由として明確化できること、第三に──この後に紹介する反目的論の特徴づけと合わせることで──反目的論との対立点を明確化できることをあげられる。

他方で、反目的論の立場も、後方指向の理由と結びつけることで特徴づけることができる。反目的論者は、後方指向の理由の一部が価値と関わることを認める。スキャンロンがあげた反例もまた後方指向の理由が価値と関わる事例だと考えられる。

まずスキャンロン型の反例で問題になっているのが、後方指向の理由の一種であることは問題ないだろう。セリヌンティウスが友人メロスのお見舞いに行く際、この行為を正当化しているのは、お見舞いに行くことによって達成される何らかの外的な目的――例えば、それによって友人関係を維持すること――ではなく、自分の大切な友人が病気で入院しているという状況だ。

また、こうした理由が、価値といかなる関係にあるかという点についても、スキャンロンの主張を拡張すれば理解できる。改めて確認すれば、スキャンロンの主張は、友情を価値づけることの中には、〈友人が苦境にある場合にはなぐさめる〉〈友人への裏切りを避ける〉などの理由を認めることが含まれているというものだった。

この際、第一の選択肢としては、一般主義的に考え、友情を適切に価値づける者は、「友人が苦境にある状況においては一般になぐさめる理由がある」といった規範的推論の一般的なパターンを受け入れるという風に捉えることができる。あるいは、第二の選択肢として、もっと個別主義的に考えることもできる――友情を適切に価値づける者は、個別の状況を考慮した上で、友人が苦境にあることをなぐさめる理由とみなす傾向があると。本稿では、この一般主義的な推論パターンと、個別主義的な傾向性をまとめて、「理由づけパターン」と呼ぶことにする[*25]。

いずれの場合でも、セリヌンティウスが友情を適切に価値づける者であるかぎり、セリヌンティウスは〈友人が苦境にあればななぐさめる〉に相当するような理由づけパターンに従う傾向をもつだろう。一方、価値・価値づけリンクによれば、そのような価値づけが適切なものであり、あらゆる者に友情を価値づける理由があるのであれば、友情には価値がある。つまり、友情が価値をもつという事態は、少なくとも部分的に

[*25] 別の著作で、スキャンロンは理由の一般的形式を事実、行為者、条件、行為・態度の四項関係と見なしているが、そこで考えられているのは、ここでいう推論パターンや傾向性と同様の〈これこれの状況のもとでこれこれの行為・態度を選ぶ理由がある〉という形式だと思われる(Scanlon(2014))。

は、そのような理由づけパターンが妥当なものであることによって構成されるのだ。言い換えれば、この立場によれば、友情が価値をもつということは、部分的には、苦境にある友人をなぐさめるべきだということを別様の仕方で言い表わしたことに他ならないということになる。また、友情に価値を認める者はそのような理由づけを妥当なものとして認めるだろうと考えることもできる。

一般化すれば、反目的論者は一部の価値について、次のような後方指向の理由と価値の関わり方を認める。

後方指向の理由と価値の構成的関連

X の価値が後方指向の理由と構成的関連をもつ iff X が価値をもつという事態は、少なくとも部分的には、後方指向の理由に関する理由づけパターン R が妥当なものであることによって構成される[*26]。

これによって、反目的論者が言う、尊敬を求める価値、尊敬する理由を次のように定式化できる。まず尊敬を求める価値とは、友情の価値のように、後方指向の理由と構成的関連をもつ価値を指すと考えられる。次に、尊敬する理由とは、後方指向の理由のうち、そのような仕方で何らかの価値と構成的関連をもつ理由を指すと考えられる。

なお、この際、上記の定式化に見られる理由づけパターン R は、X の種類によって変化すると想定している。形式的には、上の定式化の X は全称量化の変項であり、R は存在量化の変項であり、R は X のスコープの内側にあると捉えてほしい。例えば、友情の価値は、部分的には〈友人が苦境にある場合にはなぐさめる〉といった理由づけパターンが妥当なものであることによって構成されるかもしれない。一方、平等の価値や美的価値は──それらが反目的論的価値として認められるのであれば──、まったく異なった理由づけパターンの妥当性によって構成されるかもしれない。次節では、この価値の多元性──価値の種類によって異なる理由が要求されるという立場──についてもう少し説明しよう。

3.4 反目的論における価値の多元性

本稿が提示する解釈では、価値の反目的論は価値の多元論の一種だ。価値の多元論の多くのバリエーションは、単に複数の比較不可能な価値があることを認めるだけだが、この立場はさらにそれ以上のことを主張している。この立場によれば、反目的論的価値は、価値の種類によって異なる後方指向の理由と結びつくことが認められる。

この立場については、理論的にも、解釈的にもさまざまな疑問が向けられうる。繰り返しになるが、本稿の目的は反目的論の擁護よりも対立点の明確化にあるため、ここであらゆる反論に答えることはできない。だが、いくつかの疑問について以下で簡単に応答しておくと、立場をはっきりさせるために役立つだろう。以下では、特に価値の多元性について、いくつかの疑問に答えておきたい。

[*26] ここで「少なくとも部分的には」という挿入句は、X の価値が単一の理由づけパターンによって構成されるわけではないという可能性を認めるために入れられている。X の価値は、複数の理由づけパターンによって構成されるかもしれないし、あるいは理由づけパターン以外の何らかの要素も構成要素として含まれるかもしれない。

ひとつの疑問として考えられるのは、この立場によれば、結局のところ、尊敬する理由は、価値の種類に応じて非常に多様な理由を含むことになり、統一的説明はえられないのではないかということだ。尊敬というアイデアを明確化することによって反目的論の立場を明確化すると言っても、結局のところ、尊敬は非常に多様な事柄を含むことになる。

この疑問については、部分的にはその趣旨を認めたいと思う。わたしが採用する解釈においても、反目的論的な価値のあり方は、価値の種類によって大いに異なる。このため、価値の尊敬について、単純な統一的説明を与えることはできないだろう。だが、わたしはこれが大きな問題だとは考えない。この立場は価値の多元論の一種ではあるが、価値の多元論をとったからと言って、価値に関するいっさいの理論化が放棄されるわけではない。少なくとも、単純な統一的説明を与えることが難しいとしても、個々の価値について探求する手がかりがまったくなくなってしまうわけではない。また、ある程度一般的な説明の方針を与えることが不可能になるわけでもない。

実際、本稿で提示した解釈は、個々の価値を構成する理由づけパターンを特定するための一般的方針としても役立つはずだ。例えば、友情の価値がどのような理由づけパターンによって構成されるかを考えるためには、友情を適切に価値づける者が、どのような理由を認めなければならないかを考えればよい。実際、ここまでの箇所では、まさにこのような方針に基づいて、〈友人が苦境にある場合にはなぐさめる〉〈友人への裏切りを避ける〉などの理由づけパターンを特定してきた。同様の方針は、美的価値、道徳的価値、勇敢さの価値などを考える上でも採用できるだろう。つまり、この立場では、単純な統一的説明がえられないとしても、対象に即した説明を与えていくことは十分可能なのだ。

次に、関連するが別の反論として、スキャンロンの立場の解釈としてもこの立場に異論が向けられるかもしれない。ひとつの争点になりえるのは、価値・価値づけリンクの解釈だ。再掲すれば、価値・価値づけリンクは、以下のような双条件文だった。

価値・価値づけリンク

x には価値がある iff あらゆる者に x を価値づける理由がある

本稿のここまでの部分では、この右辺の条件を、暗黙のうちに、「あらゆる者には **x という対象に即した適切な仕方で** x を価値づける理由がある」のようなかたちで解釈していた。これは、対象の種類に応じて、求められる価値づけのあり方が変化するという解釈だ。これを――対象に応じて異なる価値づけが要求されるという意味で――価値・価値づけリンクの**変動型解釈**と呼ぼう。

だが、実際にはこの右辺の条件は、価値づけの仕方について明示的には述べていない。実際、友情をおかしな仕方で価値づける人物であっても、少なくとも友情を価値づけているとは言えるだろう。このため、この双条件文の右辺は、「あらゆる者は、**どのような仕方であれ**、x を価値づける理由をもつ」のように解釈する余地があるかもしれない。言い換えれば、仮に友情に価値があるなら、あらゆる者は友情を価値づける理由をもつが、その価値づけのあり方はどのようなものであってもかまわないという解釈だ。これを―

ー任意の仕方での価値づけが認められるという意味で――価値・価値づけリンクの**任意型解釈**と呼ぼう[*27]。この解釈をとれば、少なくとも、価値の種類によってまったく異なる理由が要請されることはなくなる――要求されるのはただひとつ、任意の仕方でその対象を価値づける理由だ。

だが、任意型解釈にはさまざまな問題がある。ひとつの問題点は、この解釈をとった場合、右辺の条件は、左辺の条件が真である場合にも偽である(したがってこの双条件文全体が偽になってしまう)ように思われることだ。友情の価値の例で考えてみよう。仮に友情に価値があるのであれば、あらゆる者には適切な仕方で友情を価値づける理由があるということは正しそうだ。だが、その場合にも、不適切な仕方で友情を価値づける理由はないだろう。むしろ、不適切な仕方で友情を価値づけ**ない**理由があると言いたくなる。つまり、おかしな価値づけは価値づけには含まれるだろうが、おかしな価値づけをすべき理由はないという事実のために、任意型解釈は問題を抱えている。

もうひとつの問題点は、これがスキャンロンのテキストの解釈としても不自然であることだ。実際、スキャンロンは、価値づけに含まれる理由が価値の種類によって異なることを明示的に述べている。

> 何かを価値づけるとは、それに対して特定の肯定的な態度を取る理由を認め、そしてそれに関して特定の仕方で行為する理由を認めることだ。**これらの理由が正確には何であるか、およびそれがいかなる行為と態度を支持するかはさまざまな事例によって異なる**。そこには一般に共通の核として、その事物を敬う理由と、それを尊敬する理由が含まれる。**ただし「尊敬」は、さまざまな事例で、実に異なった事柄を含む**(Scanlon(1998), p.95, 強調引用者)。

本稿が価値・価値づけリンクと呼ぶ主張――「何かに価値がある (あるいは「価値をもつ」)と主張することは、他人にも、自分と同じように、それを価値づける理由があると主張することだ」(Scanlon(1998), p.95)――はこの引用文の直後に登場する。こうした前後の文脈を踏まえても、ここでいう「価値づける理由」は、任意の仕方で対象を価値づける理由ではなく、上の引用文に登場するような、価値の種類によって異なる理由を指すと捉えるのが自然に思われる[*28]。

一方、別の箇所では、価値づけに含まれる理由に明示的に言及しつつ、同様のテーゼが述べられている。前段落で引用した一文を任意型の解釈で読むことは可能かもしれないが、こちらの一文に同様の解釈を適用することは難しいだろう。「ファンであることや友情には価値**がある**と主張することは、それを価値づけることに含まれる理由が良い理由であると主張することであり、それゆえ、この概念に自分の人生の形成における重要な位置を与えることが適切だと主張することなのである」(Scanlon(1998), p.90, 強調は原文)。

[*27] この解釈については、匿名の査読者から示唆を受けた。

[*28] この際、「価値づけに含まれる理由」と「価値づけの理由」は異なるのではないかという疑問をもつ人がいるかもしれないが、この点については注 4 も参照。

さらに、スキャンロンは同じ章の後半で、価値の多元論に依拠して、バックパッシング説を擁護する論証を行なっている。そこでは、「多くの異なった事物が良いとか価値があると言われうるのであり、その判断の根拠は広く異なっている」、「これらすべての事例に共通する単一の理由を与える性質は存在しないように思われる」(Scanlon(1998), pp. 97-98)と述べられている。こうした点から見ても、スキャンロン自身が価値の多元論を支持していることは明らかであり、むしろ〈価値がある〉という性質の内実が事例に応じて大いに異なることを積極的に認めているように思われる。

以上の反論が適切であるとすれば、価値・価値づけリンクの任意型解釈は誤っている。価値・価値づけリンクを仮にもう少し正確化するとすれば、「x には価値がある iff あらゆる者には **x という対象に即した適切な仕方で** x を価値づける理由がある」などのような、変動型解釈によって解釈することが適切だろう。そしてもちろん、変動型解釈は、本稿が提示したような反目的論の全体的解釈と合致している。

以上により、本稿の目的である価値の反目的論の明確化、特に尊敬型価値の明確化は達成された。スキャンロンの反目的論全体に関する本稿の解釈はこうだ——反目的論者は、一部の価値に関して、後方指向の理由に関する理由づけパターンと価値の構成的関連を認めている。また、反目的論者が尊敬型価値と呼ぶのは、そのような構成的関連をもった価値のことだ。

次節では、この解釈の利点をあげることでさらなる正当化を行なうことにしよう。

3.5 解釈上の利点: スキャンロン型反例の作り方

本節の残りの部分では、以上の解釈によってえられる解釈上の利点——つまり、スキャンロンの立場をこのように解釈することの利点——と、理論的な利点——スキャンロン解釈に留まらない哲学的立場としての利点——を説明することにしたい。

先に解釈上の利点を述べる。本稿で提示した解釈では、後方指向の理由と前方指向の理由という一般的な区別を導入することで、スキャンロンの議論を、より一般的な枠組に位置づけた。一般的な枠組の利点は、体系性にある。その証左として、今や本稿では、スキャンロン型反例の作成方法をある程度体系的に説明することができる。

スキャンロン自身は、目的論に対する反例として、友情の価値の事例と科学の価値の事例をあげている。ところが、これらは単発の反例として述べられているだけで、反例の作り方にまで踏み込んで説明されているわけではない。一方、本稿の解釈を利用すれば反例の作り方を説明できる。スキャンロン型反例の作成方法は以下のようなものだ。

スキャンロン型反例の作り方

- 普遍妥当的な価値をもつと思われる X を考える
- X を価値づける者が認めなければならないと思われる後方指向の理由に関する理由づけのパターン R を考える。
- 前方指向の理由を使って、R を説明できなければ、X はスキャンロン型反例の一例になる。

当然ながらこれは機械的に反例を作るアルゴリズムのようなものではない。それでも十分に実行可能な手順であり、これによって、反例を体系的な仕方で考えることが可能になる。

友情の価値の事例についてはすでに何度か紹介しているため、ここでは、スキャンロン自身のもうひとつの反例である科学の価値の事例を例に説明しよう。

第一に、科学的探求それ自体に内在的価値を認めることは普遍妥当的な価値として認められるかもしれない。第二に、科学を価値づける者が採用しなければならない理由づけパターンとしては、例えば、「科学者以外の市民が自ら最先端の科学を学ぶことに賛成理由を認める」といったものが考えられる。たとえ自らが科学の発展に寄与することは難しいとしても、市民が自ら科学を学ぼうとすることは素晴しいことであり、科学を価値づける者は、こうした試みに一定の賛成理由を見出すだろう。第三に、この理由づけパターンは前方指向の理由に還元しがたい。仮に市民が科学を学んでも、科学の発展に寄与する見込みがないのであれば、この種の理由づけパターンを、科学の発展や人類の知識の拡張といった価値ある事態を実現するための手段としては正当化できない。この立場によれば、それはむしろ科学に対する敬意の表現や、自然に対する好奇心の発露と捉えられる。また、この種の敬意の表現が妥当なものであることこそが、部分的に科学の価値を構成することになる。

次に、スキャンロンがあげていない新しい反例を考えてみよう。第一に、例えば、勇敢さは普遍妥当的な価値として認められるかもしれない。第二に、勇敢さを価値づける者が採用しなければならない理由づけパターンとして、「苦境にあるときに逃げずに問題に立ち向かうことに賛成理由を認める」というものが考えられるかもしれない。第三に、この理由づけパターンは前方指向の理由に還元しがたい。というのは、仮に、これが前方指向の理由だとすれば、勇敢さを価値づける者は、勇敢な人間であるといった価値ある事態を実現するための手段として、苦境に立ち向かうことになる。しかし、(1)勇敢であるための手段として苦境に立ち向かうことと、(2)自分がまさに苦境にあることを理由として、その状況に立ち向かうことは、別の事柄であり、理由としても別種のものである。一方、勇敢さを価値づける者が認めなければならないのは(1)のような前方指向の理由ではなく、(2)のような後方指向の理由であると考えられる。なぜなら、(1)のように、勇敢であるための手段として苦境に立ち向うことは、打算的と言うべき行動であり、勇敢なふるまいとは見なされないだろうからだ。

当然ながら、目的論者は以上のような事例を反例としては認めないかもしれないし、それぞれのステップに異論の余地が考えられるだろう。しかし、ここでの目的は、あくまで、わたしが提示した反例の作り方を説明することにある。そのため、個々の反例についてこれ以上詳しく論じることはしない。

なお、反例の作り方を定式化する利点は、単に多くの反例を作ることができるというだけではない。体系的に反例の作り方を捉えることで、反例の構成要素の分析が可能となるというのも重要な利点だ。本稿で提示した三つのステップは、スキャンロン型反例の中心的な三つの構成要素に対応している。すなわち、(1)普遍妥当的な価値、(2)それを価値づける者が認めなければならない後方指向の理由に関する理由づけパターン、および(3)この理由づけパターンが前方指向の理由に還元できないと考える論拠という三要素だ。このため、この図式を適用することで、わたしたちはスキャンロン型範例を構成要素に分解することができる。また、この三つのステップがそれぞれ問題なく成立しているかどうかを考えることで、反例の是

非をテストすることができる。

このため、このスキャンロン型反例の作り方は、反例候補に反論したい目的論者にとっても有益な役割を果たすことができる。なぜなら、目的論者は、このステップのそれぞれ――問題の事例は本当に普遍妥当的な価値をもつか、問題の理由づけパターンは妥当か、それは本当に前方指向の理由に還元できないか――をテストすることで、自らの反論を明確に組み立てることが可能になるからだ。

3.6 理論上の利点: 価値と禁止

本稿の目的は、価値の反目的論の明確化にある。一方、価値の反目的論を全面的に擁護することは本稿の範囲を超えている。

だが、この立場の魅力を一点だけ紹介するとすれば、それは価値が何かの促進ではなく、行為や態度の抑制や禁止を要請するという現象を自然に許容できることだろう。この利点もまた、本稿の解釈を通じて意味づけを与えることができる。

例えば、認識的価値を価値づけることは、証拠を重んじ、証拠のない信念を拒絶することを要求するかもしれない。また美的価値を価値づけることは、安易で華美な装飾を拒絶することを要求するかもしれない。また道徳的価値を価値づけることは、嘘をつかないことを要求するかもしれない。しかし、一方で、これらの価値は――少なくとも一見したかぎりでは――何かの促進を要求しているわけではない。トリビアルな内容の真なる信念を豊富に増やしても認識的価値に結びつかないし、装飾を無数に増やしても美的価値にはつながらないし、正直な発言の数を増やせば道徳的価値につながるというわけでもない。

ところが、目的論によって説明を与える場合には、禁止を促進によって説明するしかない[*29]。このため、証拠のない信念を拒絶することで真なる信念が増えるであるとか、華美な装飾を拒絶することで美的快が増えるであるとか、嘘を拒絶することで社会全体の功利が増すといった説明に訴えざるをえないのだ。だが、これは説明の方向がまったく逆転しているように思われる。こうした事例では、促進は禁止よりも基礎的なものではなく、単に副次的なものに思われるからだ。

一方、価値の反目的論の元では、禁止はもっとストレートに意味づけられる――これらの禁止を与えるような理由づけパターンは、認識的価値・美的価値・道徳的価値を価値づけることに含まれており、それらの価値を適切に価値づける者は、そうした禁止を導出するような理由づけパターンに従うと考えれば良いだけだからだ。

[*29] 本文では多少単純化したが、実際には価値の目的論者には、禁止を、良い結果の促進ではなく、悪い結果を防ぐという観点から理解する可能性も残されている。おそらくこちらの方がストレートに禁止や抑制を認めることに近いかもしれない。だが、仮にこの選択肢をとっても、論点は大きく変わらない。というのは、仮に悪い結果に訴えるとしても、禁止を間接的に説明しているという事態に変わりはないからだ。例えば、この立場によれば、証拠なき軽率な信念は、偽な信念という悪い結果につながるために避けるべきだと述べられるかもしれない。しかしこれは証拠のない信念を禁止する規則を直接的に認めることとは異なっている。例えば、この立場では、偽な信念につながるリスクがない場合には、証拠のない信念を避ける理由はないことになる。

4 結論

本稿では、価値の反目的論の立場の明確化を行なった。本稿の整理によれば、価値の反目的論は、後方指向の理由と価値の構成的関連を認める立場だ。さらに、反目的論が言う尊敬型の価値とは、後方指向の理由と構成的関連をもつ価値であると整理することができる。また、本稿では、この解釈の利点として、(1)スキャンロン型反例の作り方を体系的に整理できること、(2)価値が禁止や抑制を要求する事例をうまく説明できることという二点を紹介した。

謝辞

本論文は 2021 年 5 月 22 日応用哲学会第十三回年次研究大会における発表「価値の反目的論とバックパッシング説」に基づいている。当日の聴衆の方々および質問者に感謝する。また発表および論文化にあたって、中根杏樹、森功次、渡辺一暁から有益なコメントをいただいた。これらの方々、および審査過程において多数の有益なコメントや提案をいただいた二名の匿名の査読者に深く感謝する。

参考文献

[1] Ahlstrom-Vij, Kristoffer & Dunn, Jeff (eds.) (2018). *Epistemic Consequentialism*. Oxford: Oxford University Press.

[2] Anscombe, G. (1957). *Intention*. Harvard University Press.

[3] Berker, Selim (2013). Epistemic Teleology and the Separateness of Propositions. *Philosophical Review* 122 (3):337-393.

[4] Hurka, Thomas (2006). Value and friendship: A more subtle view. *Utilitas* 18 (3):232-242.

[5] Lopes, Dominic McIver (2018). *Being for Beauty: Aesthetic Agency and Value*. Oxford University Press.

[6] Moore, G. E.(1903). *Principia Ethica*. Cambridge University Press.

[7] Müller, Anselm (2011). Backward-looking rationality and the unity of practical reason. In Anton Ford, Jennifer Hornsby & Frederick Stoutland (eds.), *Essays on Anscombe's Intention*. Harvard University Press. pp. 242-269.

[8] Muñoz, Daniel (2018). Thinking, Acting, Considering. *Australasian Journal of Philosophy* 96 (2):255-270.

[9] Muñoz, Daniel (2020). From Rights to Prerogatives. *Philosophy and Phenomenological Research* 102 (3):608-623.

[10] Parfit, Derek (2011). *On What Matters Volume 1*. Oxford University Press.

[11] Pettit, P. (1991). Consequentialism. In Singer, Peter (eds.), *A Companion to Ethics*. Wiley-Blackwell. pp. 230-240.

[12] Raz, Joseph (2009). Reasons : Practical and adaptive. In David Sobel & Steven Wall (eds.), *Reasons for Action*. Cambridge University Press. pp. 37-57.

[13] Scanlon, T. M. (1998). *What We Owe to Each Other*. Belknap Press of Harvard University Press.

[14] Scanlon, T. M. (2014). *Being Realistic About Reasons*. Oxford University Press.

[15] Stocker, Michael (1981). Values and purposes: The limits of teleology and the ends of friendship. *Journal of Philosophy* 78 (12):747-765.

[16] Stratton-Lake, Philip & Hooker, Brad (2006). Scanlon versus Moore on goodness. In Terry Horgan & Mark Timmons (eds.), *Metaethics After Moore*. Oxford University Press. pp. 149-168.

[17] 安倍里美(2019)「価値と理由の関係は双条件的なのか―価値のバックパッシング説明論の擁護―」、『倫理学年報』(68):215-229

[18] 岡本慎平(2018)「T. M. スキャンロンと価値の責任転嫁説明―「理由への転回」の里程標」、『フィルカル』3(1):42-80

[19] 吉村佳樹(2021)「スキャンロンの契約主義と「道徳的動機づけ」」、『北海道大学大学院文学院 研究論集』(20):15-32

著者情報

高田敦史(無所属)